

大連から引き揚げ

函南町遺族会 太田輝彦

昭和 22 年 2 月いよいよ内地への引き揚げに向けて乗船開始です。母と、妹 4 歳、私 6 歳、大連港出港です。これで内地に帰れる。間もなくそこかしこで船酔いにより吐き気を催す人があちこちで見られました。

顧みますと今回の乗船は 2 度目の乗船でした。1 度目は 1 週間前にも大連港より出港の予定で港に行ったのですが乗船中止となりました。内地に帰れると思いきさやかな手持ちの材料で晚餐をしました。布団も生活用品も全て知人に譲って大連港に行ったのですが乗船中止でした。

その間の生活は大変でした。

全て何もなく、食べるもの、寝る布団もなく知人に頼って何とかしのぐことができました。その時の母の苦労が幼い心に残ってます。

引き揚げ船に乗船しこれで内地に帰れると強く思いました。冬の日本海は大荒れです。大きな雪が横殴りで降ってます。船酔いの人が多く、いやで甲板に行くと吹雪で寒くて 5 分とは居られず苦しい思いをしました。幾日かの後、内地が見えるとの声で、甲板に出ると陸地が小さく見えました。やっと内地に帰ってきた、白いご飯が食べれると思いました。

舞鶴港に入港し最初大きなお風呂に入りました。大きなプールのように半分をロープで仕切ってあり、私たちが入った隣で係員が網で垢をすくっていました。でも、とても暖かくようやく内地に帰ってきた実感がしました。

後の調査で

上陸地 舞鶴港 昭和 22 年 2 月 21 日 栄豊丸

太田輝彦 男 6 歳 長男 在留地大連市

母 太田きそ江より届け出あり

記載ありと

戦争末期の体験

函南町遺族会 柳本兌夫

終戦当時、私は小学校三年生（9 歳）の学童で、まだ右も左も、父や社会のこと、戦争のこともわからない年齢でした。戦況が厳しくなるにつれ、夜間の燈火の管制もされ、戦闘機や B29 の編隊が本土上空に飛来、恐さがずっとしていた事を幾つか思い出して見ました。

母や兄弟と防空壕の中からそっと外を見たり恐さに震えていたこと

私が通っていた函南小学校まで 3km の距離を往復していましたが、通学路から少し離れた場所に川を堰き止めた農業用水があって子供達にとってよい遊び場でした。下校途中夏の間（6 月～7 月）川に入って水遊びするのも日課でし

た。数人で楽しんでいると、国鉄の丹那トンネルの西側に函南駅があり、近くにエポナイト工場もあって高い大きな煙突がそびえ立っていましたが、突然飛行機の急降下の音と共にバリバリという機銃掃射の音がして2機の戦闘機が、駅か工場かを狙って入れ替わり頭上を旋回し3回繰り返して去って行き、自分達が狙われているような錯覚をして、土手の草にしがみつき顔だけ水面に出して終わるのを待って居たこと

B29が東の空から西の方向に飛来、前方には逡信省関連の施設があり狙われたのか、噂では軍の飛行機に追われて機体を軽くするために爆弾を捨てたのでは…と、数100m離れた水田に落下、高い土柱が上がる様や、陽が沈み暗くなった頃、沼津の街に焼夷弾が多数投下され、空が急に明るくなり10kmも離れた函南の地でも昼間のように明るくなり、爆音と共に恐い思いをしたことを忘れません。罪もない市民を巻き込んだものであり、人が人を殺傷する戦争は再び起こしてならない事を子供心に感じていました。

前述したように学校まで距離があり集団で登下校をして居ました。帰るため学校横の来光川の堤防で上級生と集まって居たところ、西の空から低空で小型機が学校上空に飛来、この地域を3回旋回して最後に翼を右左に3回振って西の空に飛び去って行く（帰る）機体を目の当たりにしました。上級生の話ですと、これから軍の特殊任務に赴くため、故郷の両親や家族にお別れの挨拶に来たのだ…と聞かされ、例えようがない感情が湧いて来ました。後になり軍の厳しい状況の中、そのような作戦があった事を知り悲しい思いをしたことも甦ります。

悲惨な戦争を如何なる理由でも決して行ってはいけない行為であることを考え、全ての人々が平和で安心した生活が営まれることを祈ります。